

生物多様性の保全の意義

——身近な環境問題——

(1) 生物多様性

生物多様性の保全は、地球温暖化の抑制と並び人類共通の解決すべき課題となっています。生物多様性を守る取り組みは1992年リオデジャネイロで開催された「国連環境開発会議」で「生物多様性条約」へ各国が署名したことから始まりました。我が国においては条約の締結をきっかけに「生物多様性基本法」が制定され、「生物多様性国家戦略2012-2013」に基づく取り組みが行われています。

生物多様性を維持・保全しなければならない理由としては「豊かな文化を育む」恵みや、「環境を調整し暮らしを守る」恵みをうけることにあります。生物多様性は、それぞれの地域で長い年月をかけて形づくられたことから、地域ごとに独自性を持っており、それぞれの地域で守る必要があります。また温暖化や熱帯雨林の消滅、海のプラスチックごみの問題など地球レベルの生物多様性の危機は、人間の日々の暮らしや企業の生産活動と関連しています。

(2) エコロジカルネットワーク (生物生息回廊)

野生の生き物(動物・植物)の多くは、生まれてから一か所に留まっているのではなく繁殖や採食等のために日、年、一生などの単位で、様々な環境を移動してくらししています。そのため、生き物が長くその地域で生息・生育できる様にするためには、同じタイプや異なるタイプの「生物生息空間」があり、その間を生物が移動できるようになっていることが望まれています。空間の構成要素は「核」、「拠点」、「回廊」に区分されています。



(3) 我々の取り組み

我々のサークル「所沢の自然と農業」は活動拠点として、市民大学ファーム(城地区)、山田ファーム(小手指地区)、トトロ21号地、柳瀬荘黄林閣、長野県高山村宮川農園があります。そのほかに冬場に陽子ファーム、伊東園の落ち葉掃きに参加しています。2つのファームではそれぞれ休耕地と市街地の緑地保全地で無農薬・有機肥料による野菜づくり、トトロ21号地では雑木林の保全活動、黄林閣では散策路の整備が目的ですが、他に竹林の伐採による林地の保全、常緑広葉樹の保全を行っています。それぞれの活動地域が生物生息空間として重要な役割をもっています。また、トトロ21号地では今年から林地にあるこなら、くぬぎの幼木を黄林閣で伐採した竹の中に土をいれ、それに幼木を植えて育てる試みや林地で採取したどんぐりを山田ファームで育てる試みをやっています。

昨年8月13日、我々のサークルの顧問をして頂いている淵野先生の講演会を開催しました。その中で先生は「新たな土地政策の方向性」について、“都市農地の位置付けを「宅地化すべきもの」から都市に「あるべきもの」へと転換することとして平成28年に都市農業振興基本計画が閣議決定された。また、人口増加局面では劣後されてきたが、自然豊かで良好な環境で健康に暮らすことが出来る社会の形成、自然環境の保全や再生、美しい景観の創出・保全を推進することが重要となる”と説明されました。落ち葉掃きを行っている三芳のさつまいも農家伊東園の伊東さんが「この地域を朝霞のようにしてはならないという思いで農業を継いで来た」とおっしゃっていました。伊東さんは地域の三富の農業を「日本農業遺産」に高められた方です。我々の活動が地域の環境を守り、生物生息空間を保全し、地域の価値を守る一助になっていることに活動の意義を感じています。